

## 2012年度 男子の会 講話資料

### アッラーを知る方法-第1回

(1) 自然はアッラーの証

「本当に天と地には、信者たちにとり種々の印がある。」(跪く時章45:3)

「本当に天と地の創造、また夜と昼の交代の中には、思慮ある者への印がある。」(イムラーン家章3:190)

「**われ**は、わが印が真理であることが、彼らに明白になるまで、(遠い)空の彼方において、また彼ら自身の中において(示す)。」(フッスィラ章41:53)

「天と地を創造したのか。また誰があなた方のために、天から雨を降らせるのか。それで**われ**は、美しい果樹園を生い茂らせる。そこの樹木を成長させることは、あなた方にはできない。アッラーと共に(それができる他の)神があるうか。いや、彼らは(正しい道から)外れた民である。

誰が、大地を不動の地となし、そこに川を設け、そこに山々を置いて安定させ、二つの海の間を隔壁を設けたのか。アッラーと共に(それができる他の)神があるうか。いや、彼らの多くは知らないのである。

苦難の際に祈る時、誰がそれに答えて災難を除き、あなた方を地上の後継者とするのか。アッラーと共に(それができる他の)神があるうか。だがあなたがたは、少しも留意することがない。陸と海の暗黒の中で、あなた方を導くのは誰か、また慈悲と前兆の吉報として、風を送るのは誰か。アッラーと共に、(それができる他の)神があるうか。

アッラーは彼らが(主に)配して崇めているもの(偶像)の上にと高くおられる。創造をなし、それからそれを繰り返し、天と地からあなたがたを扶養するのは誰か。アッラーと共に(それができる他の)神があるうか。」(蟻章27:59-64)

「彼らは無から創られたのか。それとも彼ら自身が創造者なのか。それとも彼らが、天と地を創造したのか。いや、彼らにはしっかりした信仰がないのである。」(山章52:35, 36)

「本当に不義な行いの者には、この他にも懲罰がある。だが、彼らの多くは気付かない。それで主の裁きを耐え忍んで待て。本当に**われ**はあなた方を見守っ

ている。そしてあなたが立ち上がる時は、主を称えなさい。夜中に、また星々が退く時にも、彼を称えなさい。」（同章52：47-49）

「夜と昼、また太陽と月は、彼の印の一部である。それで太陽にも月にも平伏（サジダ）するようなことをしてはならない。それらを創られた、アッラーに平伏しなさい。あなたがたが仕えるのなら、彼にこそ仕えなさい。」（フッスィラ章41：37）

## **アッラーを知る方法-第2回**

### （2）天性（フィトラ）はアッラーの証

人には自然の素晴らしさを感じ取れる能力が与えられている。この感知するためのな潜在能力は、天性（フィトラ）と呼ばれている。そしてこの天性の存在も、アッラー存在の証と見られる。

「人々（不信心者たち）が苦難にあったときは、横たわり、あるいは座り、あるいは立っていても（どんな状態の下でも）われを呼ぶ。」（ユースス章10：12）

つまり格別教えられなくても、人は超越した存在であるアッラーを呼ぶと言うのである。

「それであなたはあなたの顔を純正な教えに、しっかりと向けなさい。アッラーが人間に定められた天性に基づいて。アッラーの創造に、変更があるはずはない。それは正しい教えである。だが人々の多くは分からない。」（ビザンチン章30:30）

預言者伝承に言う。「アブー・フライラによると預言者は、「どの赤ん坊も必ず生まれつき天性として（イスラームに）属している。ただ、両親がそれをユダヤ教徒に、あるいはキリスト教徒に、あるいはゾロアスター教徒にするに過ぎない。それはちょうど、動物が完全なものとして生まれるようなものだ。初めから耳を切られて生まれてくる動物があるだろうか。」

### （3）人の生涯の不可思議さはアッラーの証

人の生涯には、様々なことが起こる。これらの諸経験の堆積がいかにも不可思議な糸で繋がれていることを落ち着いて素直に顧みる時、その人をしてアッラーの存在の真理に導くのである。ムスリムの逸話に次のような話がある。

「暗い牢獄に入れられた二人の男がいた。そのうちの一人は生真面目で何事

も手を抜かない性分だったが、もう一人の方は逆に怠け者で気だるく日々を送るのを普通にしていた。暗い中で二人に袋が与えられた。その中には、豆と硬い石が入っていた。真面目な男は見えなくても手探りで豆を選んで食べていた。もう一方の怠け者は、手間を省いていきなり手づかみで取っていたので、食べれない石を掴む日には空腹に耐えるだけだった。ある日、大赦が降りたので牢獄の扉が開かれて、二人は外に出られることになった。真面目な方は食べていたので元気一杯だった。他方怠け者は栄養失調で、すっかり弱り果てていた。ところが彼が手一杯にしていたのはダイヤモンドだったので、その後は暮らさに困らなかったという顛末である。」

怠け者と言えど真面目な男の分を横取りもせず、耐えるべきは耐えていた。人の性分も多くは天与のものであり、その帰結も自然で天与なのである。

人の生涯によって、アッラーの絶大な力と深謀配慮に納得させられる。

### **アッラーを知る方法—第3回**

(4) 信者への導き（フダー）はアッラーの証

次にアッラー存在の証となるのは、信者はそうでない人たちよりも、知識欲、礼儀作法、心の清純さ、善良さ、犠牲心、物事に対する熱心さ、人に対する奉仕や同胞心などの諸点で、優れた人柄と気性の人となるという事実である。

それに対して、無知蒙昧さ、無味乾燥な人柄、醜い邪な心、不正と腐敗、底なしの野望と欲望などに不信仰者は振り回され、悩まされている。この違いはどうして生じるのであろうか。

そこにアッラーの存在に気付かせられるのである。アッラーは信者に完璧さに向かうよう、その人柄を改められる。そこに見えず聞こえざる諸力を発揮されて導いておられるのである。信者はその綱にすがって引かれて、そしてその結果、言動において不信者と、あるいは不信であった当時の自分とは、明らかな違いを見せ始めるのである。

導き（フダー）はいろいろの面に出てくるにしても、なかんずく人の心に深い影響を与えるのは当然である。このような心との関係について、クルアーンにいくつも言及されている。

「これらの信仰した者たちは、アッラーを唱念し、心の安らぎを得る。アッラーを唱念することにより、心の安らぎが得られないはずがないのである。」

(雷電章13：28)

「これらの者は、アッラーの御名が唱えられる時、心は畏怖に満ち、遭遇することによく耐え忍び、礼拝の勤めを守り、またわれが授けたものを施す者たちである。」(巡礼章22：35)

実に信者が礼拝の度にまず口にする言葉の一つは、アッラーのお導きを請う「われわれを導きたまえ(イフディナー)」という言葉である。

誰に導きがあるかということも、アッラーが定められる。

「およそアッラーが導こうとお望みになった者は、イスラームのためにその胸を開く。だが迷うに任せようとお考えになった者には、その胸をまるで天に昇ろうとするかのように閉め狭める。このようにアッラーは、信仰を拒否するものに恥辱を加えられた。」(家畜章6：125)

「アッラーが胸を開きイスラームとし、主からの御光を受けた者が(そうでない者と)同じであろうか。災いなるかな、アッラーの啓示を頑なに拒む者こそ、明らかに心迷える者である。」(集団章39：22)

「どんな災厄も、アッラーのお許しなく起きることはない。誰でもアッラーを信仰する者は、その心を導かれよう。本当にアッラーはすべてのことに通暁なされる。」(騙し合い章64：11)

心が定まり確かに導かれると、次いではその導きに追加もあるとされる。この追加とは、信心がますます専心・純正(イフラス)になることである。そしてその次には、純化・選抜(イスティファアウ)されたかたちになる。

(5) 諸預言者への啓示(ワハイ)はアッラーの証

選ばれた人たちである諸預言者たちは、アダムの時代からムハンマド(彼らにアッラーの祝福と平安を)の時代に至るまで、一貫して人々にこの存在世界には称賛すべきアッラーがおられることを教え諭してきた。このように多数の民族にそれぞれの預言者が遣わせられてきたこと自体も驚くべきことで、それはアッラーの差配によっている。しかも彼らには、その預言者という名称が示すように、アッラーの言葉を預けられたのであった。

彼らのたどった運命は、アッラーの彼らに対するご支持とその敵対者に対する懲罰という、教説の正しかったことを証明している。そしてアッラーのお言葉こそが一番で、それを疑った者の言葉は最低であることも証明した。アッラ

ーを信じ、忠実で、アッラーへの信仰を呼び掛け、それに没頭できた人の言葉以上に信用すべきものがどこにあるか。

これら諸預言者がアッラーから授かるものが、啓示あるいは天啓（ワハイ）である。

「アッラーが、人間に（直接）語りかけることはない。啓示によるか、帳の影から、または使徒（天使）を遣わし、彼が命令を下して、そのお望みを明かす。本当に彼は、至高にして英明であられる。」（相談章42：51）

この節から、天啓には三種類あると解釈される。

第一は、人の心にアッラーが投げかけられる覚醒や示唆の類である。これには聞こえる言葉はなくて、たとえば預言者イブラーヒームが、息子イスマーイールが犠牲に付される夢を見たようなものである。これが上の節の、「啓示によるか、」というところに相当している。

第二は、見ることはないが、聞くことができるアッラーからの声である。この種のもは、預言者ムーサーが多く聞いている。上の節の、「帳の影から、」というところに相当する。

第三は、姿も見えて声も聞こえる天使を遣わされて伝えられる、アッラーの言葉である。天使ジブリールが預言者ムハンマドに伝え降ろした啓示がこれである。上の節の、「または使徒（天使）を遣わし、彼が命令を下して、そのお望みを明かす。」の部分に相当する。ヌーフ、イブラーヒーム、イスマーイール、ヤアコーブ、イーサー、アイユーブ、ユーヌス、ハールーン、スライマーン、ダーウードら、多くの預言者への啓示はすべてこれである。（婦人章4：163参照）

アッラーは、ムーサーには奇術の能力を預言者としての奇跡として与えられ、イーサーには医療の能力を預言者としての奇跡として与えられた。それぞれ遣わせられる民族のあり方によって、有効な能力が奇跡の証左として、預言者に賦与されてきたのであった。

言葉を重んじるアラブに対しては、預言者ムハンマドを通じてクルアーンが下ろされた。その言葉は人が作れるものではなく、アッラーのものであることは、繰り返し強調されている。

（6）99もある特別の名称の一つ一つを吟味、味わうことでアッラーを直感

する。これは以上の5つの理性的な方法とは異なり、感性に頼る方法である。

1. 本質関連：神聖者、真理者、永生者、自存者、唯一者、永遠者、始原者、最終者、富裕者
2. 創造：造形者、生成者、創造者、独創者
3. 慈愛：慈愛遍き者、慈悲深き者、平安者、信仰を与える者、赦す者、恩寵者、糧を与える者、繊細者、優しき者、恕免者、感謝者、廣大無限者、愛情者、美德者、免ずる者、寛恕者、慈愛者
4. 莊嚴：比類なき強者、制圧者、偉大者、征服者、無限大者、至高者、至大者、寛大者、莊嚴者、強力者、強固者、被称賛者、顕現者、超越者、尊嚴と恩寵の主
5. 全知：保護者、全知者、全聴者、全視者、知悉者、監視者、英知者、目撃者、内奥者
6. 全能：主権者、開示者、裁定者、護持者、扶養者、決算者、代理者、援護者、全能者、統治者、権能者、優先者、復讐者
7. クルアーンから派生（アッラーの行為や性質）：掌握者、拡張者、上げる者、  
称える者、辱める者、応答者、復活者、計算者、開始者、再生者、生を与える者、死を与える者、高貴者、大権主、集合者、供与者、禁止者、先導者、永続者、相続者
8. クルアーンから派生（アッラーに関する意味・含蓄の言及）：下げる者、正義者、尊嚴者、発見者、猶予者、公正者、加害者、裨益者、光者、善導者、忍耐者

#### 第4回資料 人の心のこと 11月11日

##### 1. 人の祈り

(1) 今の日本ほど祈りが重視されることも珍しい。祈りは一応「主への人か

らの内面的な語り」と定義できる。そうならば、祈りもお願いも結局同じということになる。イスラームの場合究極的には、唯一にして全知全能のアッラーに依拠することであり、それはすなわちアッラーを称えることでもある。

(2) 祈りだけで現実が動くのだろうか。信仰の立場からの発想だと、何が現実を動かすというのであろうか。改めて考えてみると現実は何でもない絶対主の意思である。信者としては善かれと信じるあらゆる努力を払い、それをアッラーに認めてもらい、赦してもらい、最後の日における天国行きの審判についてお許しが出るように祈り、お願いするのである。そして現実が動けばそれによしとして、改めてアッラーに感謝することとなる。

このように見てくると、祈りだけで現実が動くとは初めから考えていないということだ。なぜならばすべてはアッラー次第だからである。祈りはそのアッラーのお計らいをお願いするという位置付けになる。

(3) 祈りが叶えられなかったらどう考えるのだろうか。信者の発想を再び確かめると何かは叶うというのは、そのようにアッラーが望まれたからである。だから祈りをしたから叶う、あるいは叶わないという理解ではないのである。

そこで祈りの結果がどうであれ、アッラーのお計らいであることは変わらない。それはありがたく受け入れることとなる。そしてそれは時として喜びをもたらし、時として人の忍耐を問う試練の機会ともなるのである。人はアッラーに仕え、試されるために創造され、生きているという一事にもどることとなるのである。

(4) イスラームにおける祈りのあげ方は毎日五回行う礼拝（サラア）、折々の祈願（ドゥアア）、そして随時アッラーの名を唱える唱念（ズィクル）に分けられる。ただし口ずさむ文言は、互いに混在している部分もある。そしてすべてに共通しているのは、作法を守りつつできるだけたくさん行うことが良いとして勧奨されていることである。

いずれの場合も口ずさむ程度の声を出すだけである。一番重要なことは、祈るという意味（ニーヤ）をしっかりと持つことと、そしてアッラーに至誠（イフラス）を尽くし、その教えに従う（イムティサール）という決意と覚悟である。主は信者の姿や外見を見られるのではなく、その内心を見ておられる。クルアーンにある次の言葉を再び上げておこう。

「アッラーは、人間とその心の間に入られることを知れ。またあなた方は、

必ず**かれ**に召集されるのである。」（戦利品章8:24）

## 第5回資料 人の心のこと 12月23日

### 2. 人の幸福

（1）イスラームの教えでは、子供が多いことと財産が豊かであることが、現世的な幸せの象徴のように扱われる。しかしそれらは一時的なものであることを強調している。

「あなたがたの現世の生活は遊び戯れにすぎず、また虚飾と、互いの間の誇示であり、財産と子女の張合いに過ぎないことを知れ。」（鉄章57：20）

アッラーに認められるのは、財産や子女ではなく善行と篤信ぶりである。

「あなたがたを**われ**にもっと近づけるものは、財産でも子女でもない。信仰して善行に勤しむ者は、その行いの倍の報奨を与え、高い住まい（天国）が保証される。」（サバア章34：37）

（2）真の幸せとしては、二つの要素が挙げられる。一つには目に見える物的な対象ではないということである。二には目に見えるものが対象でないならば、人に内在する何か幸せであるということになる。それは精神的な清浄さ、心の安寧、魂の安らぎといった表現が与えられる一群の心理的な状態である。

（3）だがそれらの心理的な状態が幸福であるとしても、本当の幸せは一時的な現世のものではなく、永劫のあの世にあるという。真の信仰のもたらすものが、真の幸せであるということになる。そこにほかでは得られないような充足感と堅固さが与えられるのである。クルアーンにいう。

「この世の生活は、偽りの快樂に過ぎない。」（イムラーン家章3：185）

この現世は一時的であるとする歴史感覚は、イスラームを貫く重要なポイントになっている。逆に来世は永劫なものとして、対比される。

（4）天国の住人たちは、至福の状態であるという。そして天国の人たちは次の四種類になる。

「アッラーと使徒に従う者は、アッラーが恩恵を施された預言者たち、誠実な者たち、殉教者たちと正義の人々の仲間となる。これらは何と立派な仲間であることよ。」（婦人章4：69）

そしてこれら天国の住人の心持ちを表す固有名詞が、クルアーンには一度だ



け登場する。「トーパー」と呼ばれ、地上で心の最も安定した状態である「安心大悟」や「安心立命（トゥムアニーナ）」などよりも一層力強く能動的な心の働きであるとされる。「トーパー」には「至福」という日本語が当てられる。それは天国での安寧感と究極感を合わせたようなものと理解され、いずれにしても天国でのみ篤信の人たちが達することのできる心境である。それはまた、地上と異なり永劫の状態にあることも、もういうまでもない。

「信仰して、善行に励む者にとっては、至福がかれらのものであり、善美な所が（究極の）帰り所である。」（雷電章13：29）

### 第6回資料 人の心のこと 3. 心の安寧

（1）安寧は心の平静さ（サキーナ）である。平静さと信仰は、鶏と卵の関係にある。平静さがなければ真の信仰はなく従って真実を知ることなく、信仰なくしては真の平静さを持つことがないので幸福もないという。

（2）人は自ずと迷うし、迷えば信念やひいては信心を持ちたいとするが、それは天性に基づいているのである。同時に不安や動揺ではなく、平常心を求めるがそれも天性に基づいている。このように天性を基軸として自然に求めることとなる平静さがなければ、天性は稼働状態でないので同じく天性に基づく真の信仰は不確実となる理屈である。そして、信仰により人の生存の真髄に結ばれなければ真の平静さを持つことはないという結果になるのである。

「それであなたはあなたの顔を純正な教えに、しっかり向けなさい。アッラーが人間に定められた天性に基づいて。」（ビザンチン章30：30）

（3）平静さは周囲の人の顔色を見てばかりの態度を卒業することも意味する。逸話を手短かに紹介しておこう。

「口バに父親が乗り、息子がその後ろから歩いていた。そうすると通りすがりの女性のグループが、かわいそうに、と言って非難の声をかまびすしく上げた。そこで乗り換えて、息子が乗って父親は歩くこととした。そうすると動物愛護の一団に出会った。今度は口バが可哀そうだという、かれらの非難の声が聞こえてきたので、二人とも歩くこととした。口バも含めて全員が歩いているので、次にはいたずら坊主の子供たちの茶化す声が聞こえてきた。息子は面食らってしまって、口バを二人で背負うように父親に提案した。そこで高齢の父親は、そんなことをしたら二人とも疲れるだけではなく、人々は口バに乗って

いるべき人間に乗り物が担がれているとして、私たちが気違い扱いするだろうと諭した。そして言った、息子よ、結局は人の言うことに振り回されて、世間様におもねったり、喜ばせようとしても仕方ないのだよ、と。」

クルアーンでは、迷いのない道をまっすぐな正しい道とも表されている。それを求める気持ちのいかに強いことか。

「顔を伏せて（ただ頑なに）歩く者と、正しい道の上を規則正しく歩く者と、どちらがよく導かれるのか。」（大権章67：22）

（4）絶対者にいつでもどこでも見られている自分がすべきことをしなければならず、自分こそが自分の担当者であり責任者であるという感覚が強いとも言えるだろう。サッカーで言えば、相手方のゴールに近くなりいよいよシュートかという瞬間になると、どうぞとばかり周りの自チーム選手にたらい回しのパスをするようなタイプではないのだ。何とか自分でゴールまで持ち込んで一点をもぎ取ろうとする姿勢と発想を持ち合わせているパターンである。

<逸話の資料> 預言者ムハンマド自身が語った「天使に胸を開かれる」と題する、次のような出来事が伝えられている。サキーナをめぐってあまりに有名な逸話なので、まずここにその抄訳でもって荒筋を紹介しておく。<sup>1</sup>

ある男がアッラーの御使いに、「アッラーの御使いよ、あなたの最初の奇跡的な体験は、どのようなものでしたか？」と訊ねると、御使いはこう答えられました。

「ある時、私と私の乳母の息子は子羊を連れて出かけましたが、食べ物を持ってなかったので、私は彼に、『兄弟よ、お母さんのところから食べ物を持ってきてください。』と言いました。

そこに鷲のような白い二羽の鳥が近づいてきました。そして片方の鳥が相手の鳥に『あれが彼ですか？』と訊くと、相手は『そうです。』と答えました。すると二羽は近づいてきて私を捕らえ、私を仰向けにして腹を割りました。それから心臓を取り出して割り、そこから黒い二つの凝血を取り出しました。

すると、片方の鳥が相手の鳥に、『雪水を持ってきなさい。』と言い、雪水で私の腹の中を洗いました。そしてさらに、『冷水を持ってきなさい。』と言い、冷水で私の心臓を洗いました。次に、『サキーナ（平静さ）』を持ってきなさい。』と言い、それを私の心臓の中に植え込みました。そして、片方の鳥が相手

---

1 ムハンマド・ブン・ハサン・アルジール『イスラームの預言者物語』国書刊行会、イスラーム信仰叢書第3巻、2011年。63—65頁。

に『縫い合わせなさい。』と言うと、相手の鳥は縫い合わせ、その上に預言者の印を押しました。

それから片方の鳥は相手の鳥にこう言いました。『彼を天秤の片方に置き、そして彼のウンマ（共同体）の1000人の人々をもう片方に置きなさい。』私は自分の上方に1000人の人々がいるのを見て、彼らが私の上に落ちて来るのではないかと恐れしました。（1000人の人々を乗せた秤はその人数にもかかわらず、御使いと比べて軽すぎ、持ち上がってしまった。）それから二羽は私をそこに置いたまま飛び去りました。」

次いでアッラーの御使いはこのように話されました。

「私はとても激しい恐怖を感じ、その後乳母のもとへ戻って自分が体験したことを話しました。すると乳母は、私が悪霊か何かに取り付かれたのではないかと恐れ、『アッラーがあなたを守護してくださいますように。』と言うと、旅に出るために駱駝の準備をしました。それから私を駱駝の上に乗せ、彼女は私の後ろに乗って出発しました。そして私の実母（アーミナ・ Bint・ワハバ）のところへ到着すると、乳母は実母に、『私は自分に課せられた信託と責任をきちんと果たしました。』と言って、私が体験したことを話したのです。しかしその話の実母は驚かず、このように言ったのでした。『この子が生まれた時、私は彼から光が放たれるのを見たのですが、その光はダマスカスの宮殿を照

## 第7回資料 人の社会のこと

### 1. 誠実な社会

（1）人は誰しも、良い社会を望んでいる。それには社会の中で、互いに助けあい、平等であり、正義が満たされて、互いに信頼出来る関係が必要である。またそのためには、基礎として人々が誠実であることが求められる。

（2）誠実も正直もその意味は、真実と思うところに従って行動し、その真実を他人に伝えることである。真実であるかどうかは自分の心が判断の基準であり、誤認に基づく場合は嘘をついたことにはならない。真実であると信じるもののみに従う決意の基礎は、絶対主であるアッラーとの盤石の誓約である。また同時に、誠実であり正直でありたいという願望が、人の天性としても備わっているのである。

またそれは言葉によるものとは限らず、心の中では信じていないのに取る行為や動作も正直ではないということになる。あるいは場合によっては沈黙もそれに入る。例えば自らが罪を犯し、他の人がその咎めを受けているのに黙っているとすれば、それは不誠実であり虚偽をなしていることになる。誇張も虚偽

になり、逆に一部の真実を全てと思わせるのも同様である。約束の不履行も嘘である。

(3) 誠実の本質は真実を求めて知るということにある。クルアーンには真実、あるいは真理という用語が、ハックという言葉でしばしば登場している。

「主からあなたに下されたものが、真理であることを知る者と、物事を見られない者と同じ（ように報いられる）であろうか。」（雷電章13：19）

「本当にアッラーは、蚊または更に小さいものをも、比喩に挙げることをいとわれない。信仰する者はそれが主から下された真理であることを知る。」（雌牛章2：26）

「かれは真理をもって、あなたに啓典を啓示され、その以前にあったものの確証とし、また（先に）律法と福音を下され、この前にも人々を導き、（今）また（正邪の）識別を御下しになる。」（イムラーン家章3：3、4）

「（本当に）信仰するならば、アッラーの教訓に、また、啓示された真理に、心をむなしくして順奉する時がまだやって来ないのか。」（鉄章57：16）

(4) 誠を尽くす、至誠（イフラス）という言葉も頻出する。

「またこの啓典の中で、ムーサーのことを述べよ。本当にかれは、誠実（至誠）であり、使徒であり預言者であった。」（マルヤム章19：51）

「わたしの主は、正義を命じられる。それでもあなたがたは全霊を打ち込み、どこのマスジドでも、かれに信心の誠を尽くして祈りなさい。」（高壁章7：29）

日本では昔から「至誠天に通じる」といって、誠実さを強調した。

## 第8回資料 人の社会のこと 2. 相互扶助の社会

(1) 互いに助けあうことで、社会は維持され発展する。特に日本では大震災があり、そのことは実感となっている。それでなくても、そもそも人間は弱い存在であることを再認識しておこう。

「アッラーは、あなたがた（の負担）を軽くするよう望まれる。人間は（生まれつき）弱いものに創られている。」（婦人章4：28）

(2) そこでイスラームでは、喜捨（ザカート）という社会的な寄付行為を信者の義務とした。それは数パーセントという一定の比率で所得の一部を寄付す

るのである。但しこのザカートの率は学派によりけりで、2・5～4%程度となっている。

その寄付で集められたものは、当然社会福祉のために支出される。それは断食月に行うものや、その他随時に実行するもの（サダカ）があり、イスラーム法で細かい規定が定められた。それを喜捨という理由は、貧者への寄付は喜びにほかならないからである。その寄付は結局、アッラーからいただいたものをアッラーにお返しすることであり、その行為は大きな善行と考えられる。また当然それは報奨の対象となる。

（3）自由な喜捨（サダカ）はザカートと異なり、供出するものは現金でも何でもよい。現物、時間、同情や思いを寄せることなど。だから、礼拝も時間を費やすので、サダカの意味もある。但し供与される対象者としては両者とも、貧者、患者、旅行者、巡礼者などに優先的に与えられる。そのほか、その家族も対象となり、特に殉教者の家族に対するものは重要である。

（4）さらには継続的な効果のある喜捨というものも三種類定められた。一に子孫を作ること。それにより、末代までの繁栄を確保できるからである。二に、知識を広めて継承することで、具体的には本を書く事である。三に、将来とも使用できる礼拝所を建造することである。これらの三つの喜捨は、持続的喜捨とも訳せるもので、その功德は一時的でないのである。

（5）喜捨が普通の寄付と異なって、信者に対して大きな喜びと安堵感を与えるところが特徴である。それはまさしく、信仰の功德である。それにより従来の自分とは次元の異なった自分を発見することともなる。

（6）互いに助け合う精神が発揮されるのは喜捨の時だけではなく、例えばイスラームの初期よくあった周囲の部族との戦闘の際の教訓もクルアーンに見いだせる。

「信者は、全員が一斉に出動すべきではない。各団のうち一部が、出動し、そして残留者は宗教に付いて理解を深め、皆が帰ったときに彼らに警告を与えるのだ。」（悔悟章9：122）

このように、クルアーンは実に周到な指示を含んでいるのである。

### 第9回資料 人の社会のこと 3. 平等な社会

（1）人は男女も民族の違いも超えて、そもそも平等に創られたことをイスラームは教え説いている。アラビア語のことわざにも、「人は櫛の歯のようだ。」

というのがあつた。またクルアーンには次の有名な一節があつた。

「人々よ、**われ**は一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。」

(部屋章49：13)

(2) このような人々の平等感を一番良く実感させるのは、毎年のマッカ巡礼であろう。そこには約300万人の信者が世界中から集まり、同じ時刻に同じ行事に参加し、同じ文言を唱えるのである。また同じ衣服に身を包むこともある。それは現実としての平等である。男女はもとより、人種や国籍、そして使用する言語の違いを乗り越えるのである。

この膨大な行事は人数からすれば、世界最大である。日本の正月の神社参拝も最大の明治神宮ではやはり300万人とされるが、それは3日間の合計であり、また全員が同時刻に同じ行事に参加しているのではない。出たり入ったりする、流れている人たちの合計人数である。このような巨大な行事を実現し、それを毎年繰り返しているイスラームはよほど人を惹きつける力を持っていることが、議論しなくても証明されているのである。

巡礼は苦行とされる。それは歩く距離が長く、しばしば暑い影のないところを行進する場面もあるからだ。しかし不思議なことは、ほとんど全員ができればまた帰ってきたいという願いをもって終了することである。そこにはほかでは得られない達成感があるし、簡単にいえば人生最大の義務を果たしたという満足感と安堵感がある。

昔は故郷の村全体の支援を仰いでいわば村の代表として巡礼したので、巡礼から無事帰った人には、ハーッジという肩書きがつけられた。それほどに尊敬の的となったのであつた。運悪くして、その途中で他界した人はそのまま天国に行けるともいわれる。

(3) このような平等な社会の実現はどれほど歴史上人々が望んできたことであろう。イスラーム信者の形成する社会は、およそ地上で最善のものとなるとの信条も伴うこととなる。

「あなたがたは、人類に遣わされた最良の共同体である。あなたがたは正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、アッラーを信奉する。」(イムラーン家章3：110)

「このように**われ**は、あなたがたを中正の共同体(ウンマ)とする。それで

あなたがたは、人々に対して証人であり、また使徒は、あなたがたに対し証人である。」（雌牛章2：143）